

# 日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所

162-0805 東京都新宿区矢来町 65

電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175

発行者 総主事 司祭 相澤 牧人

## ヒロシマと広島

管区事務所総主事 司祭 ヨハネ 相澤牧人

私は8月3日から6日まで日本聖公会管区事務所の総主事として二つの行事に参加してきました。ひとつは「世界宗教者平和の祈りの集い」です。これは比叡山宗教サミット25周年の行事として行われたもので、比叡山延暦寺の境内に、世界の様々な宗教の代表者が集まり、平和のために祈りをささげるという集いです。今年はことに、東日本大震災と原発事故への反省と実践として「自然災害の猛威と宗教者の役割」というテーマが掲げられました。仏教、キリスト教、イスラーム教、新日本宗教団体、教派神道、神道、諸宗教という7つのジャンルに分かれ、それぞれの宗教の仕方、平和の祈りをささげました。また、講演会やシンポジウムも開催され、宗教者の役割について協議しました。

哲学者の梅原猛氏が講演し、「草木国土悉皆成仏(そうもくこくどしっかいじょうぶつ)」という思想を語られました。私は十分に理解しているかどうか分かりませんが、この考え方は、動物はもちろん、草木すなわち植物や、国土すなわち鉱物にも仏性が存在し、成仏可能であるということだそうです。つまりこの考え方は、自然と共生する生き方を示しているものだと思います。今回の福島原発事故から、明らかになったことを通して、人間は、科学技術文明を「草木国土悉皆成仏」という立場、すなわち自然との共生という立場で考え直さなければならぬのではないかと問いかけられました。

また、「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」というパネルディスカッションがありました。そこでは、宗教者はこれを信仰の課題として扱うことであるということ、原発はエネルギー問題であるが、今回の福島原発の事故で明らかにそれは経済の問題であることが分かった。人のいのちよりも経済成長を優先しているのではないかと、との問いが為されました。そして、どうやってエネルギーを生み出せるのか、どれだけエネルギーを使ってよいのか、を考え、ライフスタイルを変更していかなければならないのではないかと提案されました。消費を少なくすることの方策を見出し、エネルギーを地元で作れる

## □会議・プログラム等予定

(9月25日以降および  
前回報告以降追加分)

## 7月

27日(金)～28日(土) 女性デスク/  
正義と平和・ジェンダープロ  
ジェクト合同会議〔和歌山聖  
教主教会〕

## 8月

27日(月) 法憲法規委員会

## 9月

5日(水) 正義と平和・日韓協働プロ  
ジェクト

6日(木) 主事会議

7日(金) 年金委員会/年金維持資金  
管理委員会合同委員会8日(土) 正義と平和・ジェンダープロ  
ジェクト〔中部教区センター〕

12日(水) 59-2 常議員会

13日(木) 宣教協議会実行委員会〔浜  
名湖カリアック〕21日(金) 全国青年大会実行委員会  
〔仙台〕

25日(木) 管区共通聖職試験委員会

28日(金) 聖公会/ローマ・カトリック  
教会合同委員会

## 10月

4日(木) 正義と平和・憲法プロジェク  
ト〔中部教区センター〕9日(火) 聖公会・ルーテル教会協議  
会〔~~ルーテル市ヶ谷センター~~〕  
管区事務所に変更10日(水)～12日(金) 人権セミナー〔北  
海道〕

16日(火)～18日(木) 主教会〔横浜〕

19日(金) 正義と平和委員会〔京都教  
区センター〕

22日(月) 祈祷書改正モニター会議

29日(月) 収益事業委員会

30日(火) 「いっしょに歩こう」プロジェク  
ト 運営委員会〔仙台〕31日(水) 第2回世界聖公会平和協  
議会実行委員会

## 11月

7日(水) 財政主査会

8日(木) 各教区広報担当責任者会

9日(金) 法憲法規委員会

9日(金) 主事会議

ようにしていくことではないかとの考えに、学ぶことが多いと思いました。

天地創造の神が世界を造られたその意図を大切にしていかなければならないのです。まさにそれは自然との共生でありましょう。自然を、いのちを破壊することに対して宗教者は注目していなければなりません。ひとりの発言者は、宗教は国をカンシする役目があると言いました。このカンシは看護師の「看」に視線の「視る」を合わせて「看視」と書くと言われました。看護師が患者を見るそのまなざしで見ることが宗教者の役割であるということです。

最終日に採択されたメッセージでは、「核燃料から生じる危険な廃棄物を安全な処理方法が見出せない現実ひとつとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない。あらゆる宗教は、欲望の充実が幸福をもたらすのではなく、まず日々の生活の中に平安を祈り、共に生かされていることを神仏に感謝することを説く。いまや人類は物質文明に押しつぶされそうになっている現実に目を開き、誤りのない道を選ぶ岐路に立たされていることを知るべきであろう」と語っています。

続いて広島で行われた「平和礼拝」に参加しました。8月5日はカトリック教会と聖公会の合同で、平和公園の原爆供養塔前で平和の祈りをささげ、カトリックの平和祈念聖堂まで行進をし、平和祈願ミサをささげました。6日には、広島復活教会で8時から原爆犠牲者追悼聖餐式をささげ、8時15分に一斉に鐘が鳴らされ、黙祷しました。

説教者の五十嵐主教は、人は意識しなければ自己保存の本能を発揮する。それは、自分を守る、家族を守る、グループを守る。その思いが戦争へとつながっていくのではないかと語られました。だから、繰り返し、繰り返し意識していくこと、訴えて続けていくことで、これが重要なのだと言われました。さらに、人は忘れる者であるから、いつも意識していなければならないのだとも語られました。

意識することはたくさんあると思います。例えば、平和を実現すること、いのちは尊いものであること、自然との共生が人間の使命であるということ、人はパンのみで生きるのではないということ

(前頁より)

16日(金) 原発事故と放射能に関する  
ワーキング・グループ〔福島  
聖ステパノ教会〕

20日(火) 59-3常議員会

29日(木) 教役者遺児教育基金・建築  
金融資金運営委員会

30日(金) 臨時主教会(福岡)

12月

1日(土) 九州教区主教按手式

<関係諸団体会議等>

9月25日(火)～27日(木) 日本キリスト  
教連合会研修会〔箱根〕

10月3日(水)～7日(日) CCEA主教会  
〔台湾〕—中村主教出席

25日(木)～27日(土) 聖社連第  
53回全国大会(小布施・松代)

26日(金)～11月7日(水) ACC  
15〔ニュージーランド・オーク  
ランド〕—三鍋主教出席

11月29日(木) 日キ連常任委員会

となどなどです。これらの意識が自分の行動を、生活を規制し、また成り立たせていくのではないのでしょうか。

平和礼拝のプログラムの中で、被爆者の証言と若者三人による平和の主張がありました。一人の青年は平和ガイドの勉強をしているとのこと、その経験から話してくれました。広島は、世界で始めて原爆を落とされたからこそ、被害から戦争の悲惨さや平和の尊さを訴えるべきだろうと考える。広島は戦後、平和を訴え続けているカタカナの「ヒロシマ」と、過去に軍都として兵隊や兵器を送り出してきた旧漢字の「廣島」とではその立場は全く違う。この視点は、犠牲と加害は紙一重ということを教えてくれていると思います、と語られました。確かにカタカナのヒロシマと旧漢字の廣島との違いを理解しておくことは大切なことだと思います。そして、私たちは被害者にも加害者にもなりうるのだということを意識していなければならないと思います。それが戦争というものの実相だからです。

8月は6日、9日、そして15日という意識しなければならぬ日を迎えました。それは、ただ被害という面だけではなく、平和とは何かを、そして

それをどうやって造り上げていくか、実現していくかを思うときでもあると思います。私たち宗教者は、ことにそのことを神への信仰の立場から

明確に意識していくことだと思います。なぜならそれが神のみ心であるからです。そんなことを思い巡らしたときでした。

## □常議員会

第59(定期)総会後第2回9月12日(水)  
 <主な決議事項>

1. 郡山聖ペテロ聖パウロ教会建築支援費用訂正追加の件  
 2,820万円を3,135万円に変更。

第58(定期)総会期第9回常議員会での決議は、消費税と追加工事が抜けていたため。

2. 第59(定期)総会期管区諸委員追加・変更の件

- (1) 人権担当者(追加):打田茉莉(東京)
- (2) 正義と平和委員(追加):高木栄子(中部)
- (3) 「いっしょに歩こう!プロジェクト」運営委員:  
 八戸 功司祭(東北)から越山健蔵司祭(東北)に変更

3. 「教役者給与調整支援資金規程」および「教役者給与支援システム実施要綱」(案)承認の件

<可決>

次回以降の常議員会

11月20日(火)、2013年1月29日(火)

## □主事会議

■第59(定期)総会期第1回 7月25日(水)

1. 主査の選任に関して

次のとおり選任

- ・ 財政主査:中林三平、内田研吾、高橋保、山中一、久保田秀雄、若宮英生
- ・ 広報主査:竹田和子、伊達安子、吉村登志子
- ・ 渉外主査:西原廉太司祭
- ・ 宣教主査:木村直樹司祭、卓志雄司祭

## 公 示

救主降生2012年10月1日

日本聖公会

首座主教 ナタナエル植松 誠 ㊞

神のお許しがあれば、

主教被選者 ルカ武藤謙一の主教按手式を下記のとおり執行いたします。

主にある兄弟姉妹、ことに日本聖公会に属する聖職、信徒の代祷を求めます。

記

日時:2012年12月1日(土) 午前10時30分

式場:九州教区主教座聖堂(福岡聖パウロ教会)  
 福岡市中央区草香江 2-9-22

(祭色は白を用います)

以上

2. 平和宣教教育活動資金の申請に関して  
 横浜教区が行なっている「広島の平和礼拝に中高生を参加させるプログラム」への援助申請が同教区より出され、承認。  
 参加費20万円(4名分×5万円)のうちの10万円を援助
3. 原子力に関する宗教者国際会議参加者に関して  
 NCCより、掲題の国際会議にNCC加盟団体より各1名の参加が求められ、「原発問題と放射能に関するワーキンググループ」に参加者の検討を依頼  
 ・ 日程 2012年12月4日(火)～7日(金)  
 ・ 場所 郡山・会津若松

- ・経費 参加費3万円+交通費(派遣教団負担)
- ・規模 海外からの参加者も含めて約100名位が参加予定。

4. 教役者給与調整支援資金規程・給与支援システム実施要綱に関して  
「教役者給与調整支援資金規程」(案)および「教役者給与支援システム実施要綱」(案)について検討。常議員会に提出する。

■第59(定期)総会期第2回 9月6日(金)

1. 「社会事業の日」信施奉獻先に関して  
聖公会社会福祉連盟より推薦を受けて、奉獻先を特定医療法人新生病院の「新生病院創立80周年記念新規事業」に決定。
2. NCC日韓「障害者」交流セミナーへの支援に関して  
NCC障害者と教会問題委員会(委員長 橋本克也司祭)より、掲題セミナー開催のための支要請があり、次のとおり決定した。  
・開催のための支援金:5万円 ・委員長参加費用:5万円

次回以降の会議

11月9日(金)、2013年1月

## □各教区

### 中部

- ・聖職接手式 9月22日(土)10時半 軽井沢ショー記念礼拝堂 執事接手:志願者 聖職候補生フランス江夏一彰
- ・教区成立100周年記念式典 2012年10月7日(日)17時~8日(月)15時 エコ・イベント、記念感謝礼拝、祝賀会ほか 会場:中部教区主教座聖堂・名古屋柳城短期大学

### 大阪

- ・教区礼拝・講演会 9月30日(日)10時半  
場所:プール学院清心館 主題:「希望の道を共に歩もう!」 司式:主教 大西修 説教:司祭長谷川清純(東北教区「いっしょに歩こう!プロジェクト」プログラム・ディレクター)  
講演会 講師:河田昌東氏(NPO 法人チェルノブイリ救援・中部 理事/分子生物学・環境科学) テーマ:放射能汚染下の暮らし—チェルノブイリから考える

### 沖縄

- ・第56(定期)教区会 2012年11月2日(金)18時~3日(土)15時 日本聖公会沖縄教区センター

## □神学校

### ウイリアムス神学館

- ・2012年度体験入学 10月16日(火)16時半~18日(木)14時半 場所:ウイリアムス神学館(宿泊/ザ・パレスサイドホテル) 対象:満18歳(高卒)以上(上限無し) 定員:10名 費用:12000円(食費・宿泊費含む) 申込締切:10月10日(水) 問い合わせ:ウイリアムス神学館担当教員吉田司祭または大塚司祭へ。



†逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安を祈ります。

司祭 パウロ白井敏之 (東京教区・退職)

2012年9月15日(土)逝去(78歳)

司祭 車 璟恵(チャ・ギョンヘ) (大韓聖公会テジョン教区・退職 1991.4~1994.3 沖縄、1994.4~1998.3 九州) 2012年9月15日(土)逝去(84歳)

## 《人 事》

### 東北

主教 ヨハネ加藤博道

2012年9月1日付 松丘聖ミカエル教会、八戸聖ルカ教会、弘前昇天教会管理牧師に任命する。

司祭 ヤコブ八戸 功	2012年8月31日付	松丘聖ミカエル教会、八戸聖ルカ教会、弘前昇天教会管理牧師の任を解く。
	2012年9月1日付	健康上の理由により、2013年3月31日まで休養とする。
司祭 フランシス中山 茂	2012年9月1日付	青森聖アンデレ教会協働を命じる。
司祭 ステパノ涌井康福	2012年9月1日付	松丘聖ミカエル教会協働を命じる。

**横浜**

司祭 イグナシオ入江 修	2012年8月31日付	横浜クライストチャーチ管理牧師の任を解く。
	2012年9月1日付	横浜クライストチャーチ協働を命ずる。
司祭 アンドリュー・デンジャーフィールド	2012年9月1日付	横浜クライストチャーチ牧師および横浜山手聖公会協働司祭に任命する。
	同日付	ミッション・トゥ・シーフェアラーズ横浜のチャプレンとして認可する。ただし、期間を4年間とする。

**大阪**

司祭 ヨハネ成田邦雄 (退)	2012年8月1日付	願いにより、庄内キリスト教会、芦屋聖マルコ教会及び西宮聖ペテロ教会における囑託としての勤務を解く。
----------------	------------	---

**九州**

司祭 マルコ柴本孝夫	2012年7月31日付	佐世保復活教会管理牧師の任を解く。
司祭 フランシス堀尾憲孝	2012年8月1日付	佐世保復活教会管理牧師に任命する。

**沖縄**

司祭 エサウ・ダニエル・マッコーリー	2012年8月13日付	願いにより退職を許可する。
主教 ガブリエル五十嵐正司	2012年8月13日付	北谷諸魂教会管理牧師に任命する。

**《教会・施設等》**

久留米聖公会佐賀祈りの家伝道所 (九州)

郵便物宛先

佐賀市水ヶ江 2-7-2 (〒840-0054)

■先号 (第271号) 管区事務所だよりに掲載の第59 (定期) 総会期諸委員の名簿に、下記の通り追加、変更および訂正がありました。

追加: 人権問題担当者 打田茉莉 (東京) 正義と平和委員会 高木栄子 (中部)

変更: いっしょに歩こう! プロジェクト運営委員 八戸功司祭 (東北) から越山健蔵司祭 (東北) に変更

訂正: 放射能と原発事故に関するワーキンググループ 司祭 磯 晴久 (大阪)、司祭 上原榮正 (沖縄) の2名を削除。

以上



## 広島平和礼拝 2012 の報告

2012広島平和礼拝実行委員会  
マーガレット 広瀬康恵

8月5日(日)～6日(月)にかけて2012年度広島平和礼拝が行われました。

今回、広島平和礼拝に教区内外から、総数約150名の方に参加していただきました。

広島平和礼拝の目的は、①原爆犠牲者を追悼し、世界平和のために祈る。②次代を担う人たちに原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを伝える。③「主の平和」を学び、その実現のために活動する。この3つを柱に行っています。

今年は例年と違い8月5日が日曜日のため、広島平和礼拝のプログラムとしては、昼食後からでしたが、朝の主日礼拝から多数の方に参加していただきました。

最初のプログラムは被爆証言と平和の主張です。

被爆証言は広島復活教会信徒リベカ安部早苗姉より原爆投下後のようすを語っていただきました。思い出したくない、とても辛い過去の記憶を原爆の悲惨さを勇気を持ってお話していただ

いた事に深く感謝いたします。

平和の主張は3人の方がしてくださいました。

一人目は聖職候補生のリチャード池澤隆輝さんで平和公園ガイドの研修を受け、二年続けてガイドをしてくださり、その経験からお話をしてくださいました。

二人目は二年続けて広島平和礼拝に参加してくださった神戸国際大学の学生、米田智範さんに参加しての熱い思いを話していただきました。

三人目は広島復活教会信徒、大学1年のセシリア岩井愛実さんに三年前から続けている平和公園でのガイドを通じて、平和についての思いを話していただきました。

その後、グループに分かれ、被爆証言と平和の主張を聞いての思いや感想、平和についてのシェアリングを行い、最終的に各グループで話しあわれた事をグループの代表者に発表していただきました。

今回、シェアリングのグループの中に東日本大震災によって引き起こされた原子炉のメルトダウンによる放射性物質拡散により、放射能汚染で避難を余儀なくされている福島の方もいらっしゃいました。

お話の中に現地での情報の無さと見えないものへの恐怖の思いなどを聞き、もう少し被曝について考えることも必要であると思いました。

広島復活教会から平和公園の供養塔に移動し、夕刻よりカトリック教会との共同プログラムの「祈りのつどい」を行いました。

その後、歌いながら平和行進を行い、カトリック大聖堂へ向かい、到着後、平和祈願ミサに参加いたしました。



被爆証言「戦争の話」

翌日の6日は、朝8時から広島復活教会で原爆犠牲者追悼聖餐式が捧げられました。

司式者は神戸教区主教中村豊師父、説教者は九州教区主教五十嵐正司師父でした。

出席者は約60名、原爆投下時刻5分前より沈黙に入り、投下時刻には教会の鐘が響き渡りました。そこに集う一人ひとりの平和への願い、原爆犠牲者の魂の平安への願いが鐘の音色と共に天に捧げられました。

その後、9時半より平和公園碑めぐりと原爆資料館見学の初級コースと通信病院資料室と大本営跡（広島城内）の中級コースに分かれ、それぞれの場所で学びの時間を過ごしました。初級コースに21名、中級コースに14名の参加でした。

被爆67年目を迎え、被爆証言をしていただく方も高齢化している現在、次代を担う人たちに原爆の悲惨さ、戦争の愚かさを伝えることは、平和公園ガイドの働きが重要になってくると思います。

今回は東日本大震災によって、引き起こされた放射能汚染についても、大きな課題だったと思います。見えないものへの恐怖そしてその中で生活は67年前と同じではないでしょうか？

九州教区五十嵐主教さまのお話で語られた「人間は放っておくと必ずや大小にかかわらず、争いを始めるものです。ですから、私たちは原爆、戦争の悲惨さ、平和の大切さを常に繰り返し繰り返し考え、思いを新たにすることが大切です。」というお言葉のようにこの行事を通して、広島に集ってくださる皆様とともに考え、思いを新たに、「主の平和」をめざしていきたいと思えます。



また、来年、広島平和礼拝にたくさんの方が集いますように、祈りつつ、初めての方も、2回目、3回目の方も参加できるプログラムを模索しています。

参加された皆様、ご意見、ご要望等ありましたら、お寄せください。



## 長崎原爆記念礼拝 ―西本信夫兄の証言に聴く

九州教区 司祭 マルコ 柴本 孝夫

この原稿を書こうとしている時、先主日の聖書日課として示された申命記第4章9節の言葉が、あらためて私の頭に浮かんできました。

「ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい」。これはイスラエルに示された掟と法に関するものですが、この言葉に重ねて、私は今夏の長崎での体験を思いました。

8月9日、今年も長崎聖三一教会と九州教区の主催による長崎原爆記念礼拝が行われました。九州教区は、神戸教区また沖縄教区と宣教協働を行い、ことに平和に関わる働きで連携を深めて行こうとしています。そのような流れの中で、今回は説教者として神戸教区中村豊主教をお招きすることができました。教区内の教会また神戸教区と沖縄教区、平和を考えるプログラムの参加者、さらに東京教区からの方々も含め60名以上が集まりました。

五十嵐正司主教の司式、長崎聖三一教会牧師堀尾憲孝司祭の補式により礼拝が進められ、原爆が投下された時刻の少し前から一同沈黙。原爆が投下された時刻ちょうど11時2分からの1分間は、静かに響く銅鑼の音を耳にしながら黙祷を捧げました。間隔をあけて銅鑼がボーンと響くごとに、原爆が投下されたところから同心円を描くように被害がだんだん広がっていったと言われる当時の惨状をイメージさせられました。

その後、長崎聖三一教会に連なる29名の犠牲者の名前を読み上げ、参列者一人ひとりが花を献げてその死を悼み、今なお原爆の後遺症におびえ苦しむ人のため、被爆した外国人のため、核兵器廃絶と平和の実現のために心を合わせて祈りました。そして礼拝後、今年82歳になられた長崎聖三一教会信徒であり被爆者である西本信夫さんの証言を、お聴きすることができました。

じつはこの「西本信夫さんの証言に聴くこと」こそ、今年神さまから与えられたメインテーマだったのではないかと私は思われました。

西本さんは、原爆が投下されたその中心から約2キロ離れた自宅で、眠っている時に被爆されました。目覚めると、家の中は爆風によりあらゆる建具、家具が吹き飛ばされ倒れていたものの、山の裏側であったため熱線など直接の被害を受けずに済んだとのことでした。その後、一人だけ帰宅しない弟を探しに火の海と化した浦上地区に出かけられます。そして毎日のように通われていた三菱長崎兵器製作所・精密工場（長崎市立商業学校）へ向かう途中、信じ難いほどの



献花



原爆被害の惨状を目にされました。その時のことをこう表現されています。

私達は、地獄のド真中を歩いていた。焼けただれたガレキの原に、真黒にこげた死体が数えきれぬ程ころがっている。中には、幼な子を抱きかかえた母子の、痛ましい姿もある。息絶えだえの中から「学生さん、水を飲ませてください」と、か細い声をかける人もいる。なんと、むごい光景であろうか。弟も、こんなむごたらしい姿で、何所かで死んでいるのであろうか。

そして、二日目になってようやく、背中に大火傷を負い戸板の上でうつ伏せになっていた弟さんと再会します。

いた！ 背中一面に大火傷を負ったむざんな姿の弟は、学校の玄関に、戸板の上に寝かされていた。顔のそばに、お握りが二つ、誰方からかいただいたのであろう。一つは半分ほどたべている。

「苦しかったろう」。母が、オロオロした声で慰める。

「うん」。弟の返事は、意外にも冷静そのものであった。私が着ていたシャツを、そっと着せてやる。火傷というよりも、その傷は肉の深奥部まで煮えただれている。痛いなんて、なまやさしいものではなかったであろうに。思わず涙がこみあげてくる。

それから、弟さんを戸板に乗せたまま、家族四人で長い道のりを自宅まで運ばれました。弟さんは何とか自宅へと帰れたものの、わずか二日後、静かに息を引き取られます。

原爆という恐ろしくも、悲しい洗礼を受けた若い魂は、苦しみの言葉、ノロイの言葉一つ残さず、二日後に、静かに昇天して行ったのである。と証言を締め括られました。

記念礼拝と重ねて前日8日から開催した平和を考えるプログラムでは、これらの言葉を、被爆されたその時に西本さんが立たれたところ、歩かれた道、過ごされた場所に実際にご本人と一緒に立ちつつ聴くことができました。その生々しい体験から、すべての生あるものの命を一瞬にして絶ってしまう恐ろしい原爆をもう絶対に使わせてはいけないとの西本さんの思いが伝わってきました。

神さまは、かつて多くの預言者を遣わされたように、一人の人をとおして命の言葉を伝え、また私たちが進むべき道を示してくださっているのではないのでしょうか。年々多くの被爆者が召され直接に声を聴くことが困難になる中で、こうして長崎に立ち、西本さんの証言に聴くことができたのは、まさにかげがえのない体験であり同時に責任を感じます。私たちはこの言葉と思いを語り伝えたいと思います。



## 2012 日本聖公会青年大会の報告と成果

### — 東日本大震災の被災地で開催 —

#### ■大会のテーマ「re:member ～ひかりを灯そう～」

実行委員長 岩本 翔太 (京都聖マリア教会)

2012年日本聖公会全国青年大会は当初予定していた関西から場所を変え、東日本大震災の被害が大きかった東北で行うことになりました。1年半が経過した現在も地震、津波、原子力発電所の事故による放射線の被害などに苦しみ、困難のうちにある方がたくさんいます。しかし、テレビや新聞、ラジオなどのメディアから震災の話題が少なくなり、日が経つごとに多くの人の心の中から東日本大震災が過去のものになり忘れ去られていくことを、わたしたち東北に住む人間は1番恐れています。

そこで今大会のテーマを「re:member～ひかりを灯そう～」としました。このテーマには震災を風化させない為にも覚え続けるという意味の“remember”、この被災地で「もう1度(re)聖公会の青年達(member)が集まり、皆でひとつのひかりを灯そう」という2つの意味が含まれています。主題聖句には「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20)としました。イエス様は決してわたしたちをひとりにならず、いつも忘れずそばにいてくださいます。このことも是非心に留めてほしく思いました。

また、テーマにある「ひかりを灯そう」は聖歌478番の一部から抜粋しました。この聖歌は東日本大震災の追悼礼拝やレクイエムで多く使われ、わたしたち実行委員にとっては特別な聖歌でした。青年大会の参加者が被災地を覚え、亡くなられた人や困難のうちにある人、復興に携わる人などの心の中に祈りを通してひかりを灯したいという願いが込められています。

今大会では3コースに分かれての被災地巡り、協力である「日本聖公会いっしょに歩こう!プロジェクト」の説明を副本部長の池住圭さんから、基調講演に「仙台超教派被災者支援 東北

ヘルプ」事務局長の川上直哉牧師、現場からの報告として日本聖公会東北教区司祭の越山健蔵司祭の講話、震災について全体やグループでの分かち合いなど、様々なプログラムを用意しました。

いっしょに歩こう!プロジェクトの説明では東北教区東日本大震災支援室のみで活動していた、いわゆる“緊急時”の支援から、新たな生活や今までの生活へ“再建”するための支援、ターゲットをある程度絞った形での支援へと移り変わっているという内容でした。

川上牧師の基調講演では「教会にできることがある」という題で話していただきました。講演の中ではいっしょに歩こう!プロジェクトとはまた違った支援の方法を取っている東北ヘルプの働きの紹介や、青年へ向けてのメッセージをお話していただきました。

越山司祭の「現場からの報告」では、原発の事故に伴い放射線被害のある福島県内の当時の状況、福島県のメディアでは報道されていない現状、県内での活動内容をお話いただきました。

被災地巡りでは宮城県石巻市、南三陸町、福島県新地町の3コースにそれぞれ分かれ、最後には仙台市宮城野区荒浜に集まりお祈りを捧げました。ここでは、参加者全員が流木で作られた十字架を囲み、全員で東日本大震災の嘆願を唱えてから主題聖歌を歌いました。参加者全員が海岸に立って心をつにし、各々が感じ取ったことを祈りとして、お献げできたことは本当に感謝しています。

それぞれのプログラムの間には全体、グループの分かち合いがあり、できるだけグループを固定せず多くの人と思いを分かち合いました。今

大会には韓国からの青年の参加者もいて、この分かち合いでは言語の壁を乗り越え自分の想いを精一杯話す青年たちが印象的でした。

最終日の聖餐式では、最後の分かち合いで各グループに代祷を作っただき、東日本大震災の嘆願の前にそれを読み上げました。奉献では一人一人想いを書いた紙をお捧げし、奏楽には青年6人による演奏もあり、とても豊かな聖餐式を守ることができました。

今大会は参加者の平均年齢が23歳と非常に若く、これから聖公会のみならず社会を担っていく若い世代の参加者が多かった事はわたしたち実行委員も大変嬉しく思っています。昨今、「うちの教会、教区には若い人がいない」ということをよく耳にします。確かに一世代前に比べれば絶対数は少なく若い世代が少ないかもしれませんが、しかし、「青年活動がしたい!」「教会をもっと盛り上げたい!」などと意欲的な青年は本当にたくさんいます。数十年前から絶えず続いている素晴らしい青年活動もありますが、近年行われていなかった青年活動が復活したり、全国



的な新しい青年活動が始まったりもしています。今大会の平均年齢が23歳というのも少なからずこれらの影響があることは確かです。

2012年日本聖公会全国青年大会をこの東北で行え、実際に被災地に立ち、多くの人と想いを分かち合えたことは、これからの人生で大変貴重な経験となると思います。それぞれが感じたことを持ち帰り、家族や友人、教会の方などと共有してもらいたいです。千年に一度と言われる未曾有の災害を無駄にしない為にも、決して2011年3月11日に起こったことを忘れず、わたしたちの心に置き続けたいと思います。





## 2012年日本聖公会宣教協議会を開催

### 「いのち、尊厳限りないもの」 宣教する共同体のありようを求めて

2012年9月14日～17日/全教区から140名が参加

2012年9月14日(月)から17日(月)の4日間、浜名湖畔に建つ研修施設「カリアック」に日本聖公会11教区の教区主教と各教区代表、管区諸委員会、そして大韓聖公会からの代表など、信徒・教役者140余名が集い、「2012年日本聖公会宣教協議会」が開催されて、私たちはたくさんの時間を共有し、日本聖公会のこれからを学び合い、語り合った。

開会礼拝の説教で、五十嵐正司主教(宣教協議会実行委員長)は箴言16.1「人間は心構えをする。主が舌に答えるべきことを与えてくださる。」、箴言16.9「人間の心は自分の道を計画する。主が一步一步を備えてくださる。」を引きながら、教会を取り巻く困難な状況の中にあって日本聖公会は何をどのようになすべきかについて、宣教協議会の全出席者が大韓聖公会からの参加者と共にこの4日間を「祈りながら考えよう」と、今回の会議の意義にふれ、これから予定される清水靖子シスターと西原廉太司祭による二つの基調講演と、長谷川清純司祭・越山健蔵司祭による《いっしょに歩こう!プロジェクト》からの報告をもとにして、日本聖公会が直面する諸問題、①信徒の減少、②聖職志望者の減少、③若い信徒の減少、④教会建物の老朽化、⑤逼迫する財政、⑥東日本大震災による被災、⑦福島原発による放射能汚染、⑧大震災と放射能汚染からの故郷喪失、⑨社会格差と貧困…などの諸問題に対して、私たち一人ひとりがどのように立ち向かい、取り組んでいくかを、15グループに分かれての4回にわたるそれぞれの討議で「思いを出し合い」、その成果を各教区に持ち帰って更に深め、輪を広げてほしいと強く呼び掛けられた。

第一日目の基調講演は、「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」という主題のもとにベリス・メルセス宣教修道院の清水靖子シスターが、福島第一原発災害による放射能汚染に関する深刻な問題提起と、この現実においてキリスト者として、どのような生き方を選択すべきかを問われた。清水靖子シスターのレポートの一端、…「原発と、その核生成物は、細胞を寸断し、社会を寸断し、被災地を寸断し、家族を寸断し、生きとし生けるものを寸断する。」「福島県の子供の甲状腺検査で、3万8千人の35%、1万3千人以上に嚢胞・しこりが発見された。これはきわめて異常。」「東電は福島第一原発事故で広島原発の百七十発分の放射性セシウムをばらまいて、それを無主物、だと主張。」「原発再稼働の本当の狙いは、エネルギーの「需給問題」ではない。廃炉にすると、原発⇒巨額の負債になるためである。」等々。

東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう!プロジェクト」の長谷川清純司祭は、被災者に寄り添う中での主イエスとの出会いと、それに支えられた教会のはたらきを語られた。また同じ東北教区の越山健蔵司祭は、放射能汚染地域に生きねばならない人々の苦悩と現実、そしてその中に置かれている教会と牧師の苦悩と躊躇とを告白された。

第二日目の西原廉太司祭による基調講演「わたしたちの『宣教』を想い描くために—日本聖公会の宣教の課題と可能性—」では、広い視野と豊富な資料にもとづいて、多様な宣教ヴィジョンが提供された。(講演レジュメから)○1995年日本聖公会宣教協議会で確かめられたこと ○



日本というコンテキストで宣教することとは ○アングリカン・コミュニオン「宣教の5指標」(5 Marks of Mission) ○英国教会のParish and People運動(交わり コイノニア、礼拝 レイトゥルギア、み言葉 ケリュグマ、奉仕 ディアコニア、証し マルトゥリア)。○ウェールズ聖公会の宣教ビジョン Curch in Wales Review - July 2012 /カナダ聖公会 Vision 2019 \*以上の四項目は日本聖公会の「宣教の道しるべ」となる○「いのち、尊厳限りないもの」-WCC第10回総会との関連で ○「牧会的配慮」としての聖公会の宣教理解 ○東日本大震災「いっしょに歩こう!プロジェクト」から学ぶこと ○日本聖公会の小さな宣教の歩み(九州教区大口聖公会、中部教区岡谷聖バルナバ教会) ○おわりに・わたしたちの「宣教」を想い描くこと

夕食後、笹森田鶴司祭によるバイブル・シェアリングは「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか～神との関わりの中で問いかけに応

える～」というテーマで行なわれ、被造物としての人間の使命について互いに分かち合った。

これらの多くの学びのあと、私たちは15のグループに分かれて、これからの教会のヴィジョンについて語り合った。

第三日目は、各グループで話し合われた様々な内容を各グループリーダーが持ち寄り、日本聖公会が被造物すべての〈いのちと存在〉を守る決意を持つ共同体として新たなものとされていくための「提言」としてまとめ上げて、それを各教区に持ち帰るために最後の協議を行なった。聖公会の明日に向けての指針の基本としてもらうためである。閉会聖餐式に先立って行なわれた「まとめ」の会は、「提言(案)」の内容を前向きにとらえる議論が白熱して予定時間を大幅に超えるほどであった。以下に、「提言(案)」の骨子を抜粋する。なお、成文は後日改めて発表されることになっている。

### 日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉の提言(案) (前文省略)

日本聖公会が新しい共同体となるために、各教会の共同体、またそこに属する一人ひとりが過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩み出します。キリストの救いと喜びをこの世に表すため、また sacrament を通じて与えられる神の恵みに多くの人々を招くため、み言葉と礼拝への思いを深め、信徒・聖職ともに祈ります。教会の建てられた地域のなかで、特に癒しと解放を求める人々に心を通わせ、一人ひとりの〈いのち〉を宝とし、地域と共に主の救いに与ることを願います。

わたしたちは、仮に『日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉』と名づけ、少なくともこれからの十年間、日本聖公会すべての信徒、聖職、教会、教区が心をつなげて、それぞれの場、それぞれの形で、以下の諸項目を中心とする〈宣教・牧会〉に、徹底して取り組むことをここに提言するものです。そして、その動きを推進するための機

関を管区と各教区に設置し、相互に協力しながら、新たな共同体作りをめざします。どのような機関がふさわしいのかについては、管区においては常議員会に付託し、教区においてはそれぞれの教区においてしかるべき機関にお願いし、新たな歩みに踏み出します。

十年後に「2022年・日本聖公会宣教協議会」を開催し、十年の間、わたしたちは、どのように〈宣教・牧会〉に取り組むことができたのかを分かち合うことを、合わせて提案します。それは同時に、わたしたちの〈宣教・牧会〉の果実を刈り取る収穫感謝の祭りとなるはずです。

### 1. み言葉に聴き、伝えること〈ケリュグマ〉

- ・み言葉こそ〈いのち〉の原点であるということを確認します。
- ・信徒と聖職が共に、ていねいな〈宣教・牧会〉を担っていくため、特任聖職、伝道師などを含め、より多様な信徒・聖職の働きを作りだしていきます。
- ・多様な信徒・聖職のために必要な養成・訓練

プログラムを整備します。

- ・神学校での教育を教区や管区が積極的に捉え直し、神学教育の指導者を養成するプログラムを整備します。
- ・「被災者に寄り添う主イエスとの出会い」など、被災地「東北」の現場における証言集を発行し、他の諸教区・教会も「東北」から聖書を読み直す試みを始めます。それを通して、各々のパリッシュで担われるべき課題を明らかにします。

### 2. 世界、社会の必要に応え仕えること〈ディアコニア〉

- ・困難な状況に置かれた人々と共に歩む中で、〈いのち〉より他のものを優先する社会構造に「否」を言い、社会的矛盾を明らかにし続ける勇氣を持ちます。
- ・わたしたちは、これからも東日本大震災の被災者に寄り添い、共に歩み、祈り続けます。
- ・この世に仕える豊かな共同体の基盤形成のために、周縁化されている人々が、教区・管区の意味決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性や青年たちの参画を推進します。(以下省略)

### 3. 生活の中で福音を具体的に証しすること〈マルトウリア〉

- ・教会が存在することこそが宣教となるために、既存の習慣や組織に固執せず、大胆につくり変える勇氣を持ちます。(以下省略)

### 4. 祈り、礼拝すること〈レイトゥルギア〉

- ・すべての人々の〈いのち〉の尊厳に注目し、礼拝式の研究と実践に取り組みます。
- ・多様な礼拝を奨励します。選択肢を増やし、多様な楽器の使用等を視野に入れ、より豊かな礼拝を目指します。
- ・多様な礼拝式文の蓄積のため、データベース化を図ります。(以下省略)

### 5. 主にある交わり、共同体となること〈コイノニア〉

- ・すべての人の居場所、出会いの場となる教会を形成します。
- ・教会内外における「高齢者」「青年」「子ども」「女性」「男性」とひとくりにしないで、一人ひとりが生きている重みを尊重される関係を意識し、いっしょに学びあう、気付きあう、見ていく、考える交わりを形成していきます。(以下省略)
- ・教区間協働、教区制の再編を具体的に推進します。

2012年9月17日

2012年日聖公会宣教協議会参加者一同

〔付記〕

4日間にわたる宣教協議会が予定通り順調に進行したのは実行委員会の周到な準備と当日の御努力によるものであり、またそれを支える日本聖公会の青年のみなさん〈スチュワード〉の惜しみない協力があつたからである。また、宣教協議会の内容を速報するニュースレター『鰻瓦版』(うなぎかわらばん=「浜名湖」瓦版)が、スチュワードの手によって第4号まで発行され、会議の始まる前に毎朝、親しみをもって愛読されていたことを記したい。

(記・管区事務所広報主事  
鈴木 一)



## 東日本大震災支援

「いっしょに歩こう！プロジェクト」  
仙台オフィスから ⑫

— 「センターしんち」 便り —

センター長 司祭 長谷川清純

6月9日(土) 開設された「被災者支援センターしんち(愛称:センターしんち)」は、皆さんのお祈りで支えられています。遠くから近くから私たちのことを覚えていただいている、とそうに思えることが私たちスタッフと被災された方々の力、気力、後押しになっています。ありがとうございます。

8月、夏休み子どもプログラムはいくつも行われましたが、ある夜、仮設の子どもたちは手持ち花火に興じて夢中でした。また、オリジナルなTシャツを作る「世界で一つのTシャツづくり」を、がんど屋仮設(町外の原発避難世帯住宅)と広畑仮設で開催すると、ほぼ全員に近い子どもたちが大勢集まり、布用絵の具で好き好きに絵を描いたり、自分の名前を書いたりそれぞれ味わいあるTシャツが出来上がりました。それにしても、一番熱心だったのはついでこれたお母さん方だったようでした。今後もこのような場面がたくさん必要だと感じます。

8月24日、2学期が始まったふじ幼稚園は1年1ヶ月間、仮園舎にしていた真庭区民館で最後の保育をし、区長さん関係者に対する感謝の会を開きました。そして9月6日、いよいよ新築の園舎にて保育を開始したのでした。先生方は緊張の中にも笑みに光るものがありました。

次に、何組もの信徒、聖職者訪問グループやボランティアグループが来られました。大韓聖公会宣教者団第2陣は8月に1週間、青葉静修館に宿泊され、3日と4日に新地町でボランティアワークをされました。男性4名とスタッフは広畑仮設住宅で木製の外用長椅子のペンキ塗りを2日間で完成させました。女性2名とスタッフたちは、比較的少数世帯の仮設住宅である作田、小

川北原、新林、前田、すずめ塚の5仮設を戸別訪問しました。日本福音ルーテル教会被災者支援「となりびと」から分けていただいたパイナップル缶詰を、赤ちゃんから高齢者まで全員に一人1缶をお配りしました。5仮設では609人分でした(新地町8仮設全体では約1420人分を配りました)。韓流ファンのお母さんや漁師さんたちとの和やかな語らいや、子どもたちとの出逢いがあり、まさに日韓交流に花が咲きました。広畑では、ラダーゲッターの日韓戦が熱く繰り広げられました。



大韓聖公会宣教者団一行

その他、春日井市のルーテル教会牧師ご夫妻、北関東教区から、大阪からとフランスからの学生さんたち、東京教区被災地リレーウォークの11名、名古屋柳城短期大学の学生さんたち15名と引率先生方5名も来られました。柳城短大の皆さんは加藤主教巡回日の9月2日磯山聖ヨハネ教会仮礼拝堂で聖餐式を共にささげ、その中で小さな曲3曲を奉獻、信徒たちにプレゼントしてくれました。多くの方々が新地に思いを寄せてくださっている証拠と受け止めました。聖公会神学院3年の永谷亮聖職候補生は夏期実習を主にセンターしんちで行いました。ここでのすべてが、卒業後の牧会の肥やしになるだろうと信じています。

さて、センターしんちは、まさにオープンスペースとして機能されてその真価を発揮するものと信じております。8月24日、ついに「ほっとコーナー」が開店しました。このコーナーで中心と

なっでご奉仕くださるのが、作田仮設にお住まいの被災された女性です。彼女の明るい笑顔とおしゃべりが、煎り立てのコーヒーをなお一層おいしくしてくれています。そのお仲間が集まって笑い声が絶えません。お借りしている土地の地主さんと広畑仮設自治会長さんは毎日朝夕に立ち寄られます。こうして、センターしんちはもはや地元の皆さんのものになっています。なんと幸いなことでしょう。



ほっとコーナー



日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.org/province/> ☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。  
[comm-sec.po@nskk.org](mailto:comm-sec.po@nskk.org) 広報主事(鈴木)宛て

 **いっしょに歩こう!**  
**プロジェクト**  
日本聖公会東日本大震災被災者支援

ホームページ <http://nskk.org/walk/>